

令和 2 年 7 月 13 日現在

機関番号：34507

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K11969

研究課題名(和文) 省察を基盤にした看護技術教育における教育実践の様相と臨床の知に関する研究

研究課題名(英文) Aspects of education and clinical knowledge in education of nursing skills based on reflection

研究代表者

脇坂 豊美 (Wakisaka, Toyomi)

甲南女子大学・看護リハビリテーション学部・准教授

研究者番号：50315321

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では看護技術教育の中でも演習場面に注目し、教員自身の省察をとおして教育実践の様相について記述していく。それをとおして、看護技術教育における看護教員の臨床の知を明らかにすることを目的とする。ここでは、看護技術の演習、中でも看護の初修者が学ぶ看護技術焦点を当て、「体位変換」の演習のまとめの場面における教育実践の様相について、省察をとおして明らかにすることを目的とした。「体位変換」の演習のまとめの場面における教育実践の様相として、授業における「ねがい」を軸にしつつも、予測を超えた学生の経験を捉えながら、新たな授業の運びを生み出すという教育実践の様相が明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

看護技術に関する先行研究は、技術項目毎に教授方法の工夫や学生の学び、技術の習得状況に注目したのが多い。本研究でのアプローチのように、看護技術教育における看護教員の教育実践の様相を明らかにすること、授業の中で生成される看護教員の臨床の知(知恵とわざ)を明らかにした研究はまだない。本研究の成果は、省察的な教育実践を基盤とした看護技術の教育方法の新たなモデルとなり得る。

研究成果の概要(英文)： This study focused on practical of nursing skills and describe through the teacher's reflection. Therefore, this study aims to clarify clinical knowledge of nursing teachers in nursing skills education. We focused on practical of nursing skills, especially nursing skills that students learn in the initial stage. The purpose of this study is to clarify, the aspect of educational practice in the scene of the summary of the exercise of "body position changing" through the teacher's reflection.

We clarified the aspect of educational practice that creates new progress of class while setting the desire as axis and capturing the student's experience beyond expectations.

研究分野：看護学

キーワード：看護技術 演習 看護技術教育 看護教員 看護学生 省察

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

医療の高度化、複雑化、在院日数の短縮、地域、在宅の場への医療の移行など、医療を取り巻く環境は大きく変化し、看護師には高度な看護実践能力が求められるようになった。そのような中、看護学教育の在り方に関する検討会報告「看護実践能力育成の充実に向けた大学卒業時の到達目標」(文部科学省, 2004)、「看護基礎教育のあり方に関する懇談会論点整理」(厚生労働省, 2008) 大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会「大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会最終報告」(文部科学省, 2011) など、看護実践能力を高めるための看護教育に関する検討が進められてきた。それに伴い、看護基礎教育の現場では、看護実践能力の中核となる看護技術の効果的な教育方法についての検討が課題となっている。

このような中、例えば、卒業時の到達目標の項目をもとに、さらに詳細な行動レベルのチェックリストを作成して教育するということが看護基礎教育の現場でも、継続教育の現場でも多くなされている。しかし、佐伯(2008)が言うように、看護の知は、行動主義的なもので身に付けることのできない知であり、行動主義的、行動目標的な知識観をもっていると、本当に大事なものと些細なこととの区別ができなくなってしまうということが起こる。一方、看護の知が、状況の理解や対象者とのかかわりを抜きにしては成立しないことは非常によく理解されている。しかし、教育のシステムにそれを移そうとなったとたんに、行動主義で訓練するというふうになってしまうという矛盾が生じている。チェックリストを用いながら看護技術の指導をしていたとしても、教員はチェックリストの内容だけでなく、それ以上のことを学生に伝えていることが考えられるが、そのような看護技術教育における看護教員の教育実践の様相を明らかにした研究はない。

### 2. 研究の目的

本研究では、研究者である教員自身が担当する看護技術の授業実践場面の省察を記述することとおして、看護技術教育における看護教員の教育実践の様相を明らかにすること、授業の中で生成される看護教員の臨床の知(知恵とわざ)を明らかにすることを目指す。そのために、本研究では「体位変換」の演習のまとめの場面をとりあげ、看護技術の演習において教員がどのように行為しながら思考しているのか、教育実践の様相について省察をとおして明らかにすることを目的とする。

### 3. 研究の方法

- (1)研究対象者：授業実践者である研究者自身および、看護学科1年生(対象学生は特定せず)
- (2)研究デザイン：質的記述的方法を用いた質的帰納的研究
- (3)データ収集の方法：「体位変換」の演習のまとめ場面をVTRで撮影し、音声データから逐語録を作成した。動画からは学生や教員の表情、手さばき、身体の使い方などを確認して書き起こし、逐語録に加えてデータとした。
- (4)分析方法：  
逐語録を何度も読み返し、教員の実践を文脈で区切り、その時の教員の経験や内面過程に注目し、省察として記述した。  
逐語録と省察の記述を読み込みながら、まとめの運びに沿って場面を区切った。  
区切った場面ごとに、教育実践を表す[コード]を付け、内容の類似性、共通性に基づき、【サブカテゴリ】、<カテゴリ>、テーマを抽出した。
- (5)倫理的配慮：研究者の所属施設の研究倫理委員会での承認を得た。

### 4. 研究成果

#### (1)結果

分析の結果、まとめの運びとして3つの場面が見出された。場面1は16コード、5サブカテゴリ、3カテゴリ、1テーマで構成された。場面2は7コード3サブカテゴリ、2カテゴリ、1テーマで構成された。場面3は11コード、7サブカテゴリ、2カテゴリ、1テーマで構成された。テーマを、カテゴリを<>、サブカテゴリを【】で示し、「体位変換」の演習のまとめの場面における教育実践の様相を記述した。

見出された3つの場面のテーマはそれぞれ、場面1 授業構想に沿った視点と想定外の学生の疑問から生み出されるまとめの運び、場面2 予測を超えた学生の経験から生まれる看護技術の新たな意味づけ、場面3 軸となる授業者のねがいと実践の中で湧き上がる学生に伝えたい看護技術であった(表1)。

場面	テーマ	カテゴリ	サブカテゴリ
場面 1	授業構想に沿った視点と想定外の学生の疑問から生み出されるまよりの運び	< 教員が捉えた学生の傾向と学生の疑問を合わせたまよりの方法性の吟味 >	[学生の援助の傾向を捉え、伝えるべき内容を考える]
			[学生の意見を聞きつつ、今ここで何を伝えるかを考える]
		< 看護師としての私と教員としての私を行き来しながら見せるデモンストレーション >	[事例の状況に入り込み看護師として援助を行う]
			[援助の意味やポイントを説明しつつ援助を見せる]
< 想定外の学生の疑問に応えようと思うことで、生み出されるまよりの運び >	[想定外の学生の疑問に応えようと思うことで、生み出されるまよりの運び]		
場面 2	予測を超えた学生の経験から生まれる看護技術の新たな意味づけ	< 教員の予測を超えた学生の経験 >	[学生の意見から教員の予測を超えた学生の経験を知る]
			[学生は患者役になりきることは難しいが、患者の立場に立つことはできる]
		< 学生との対話の中で見出す自分の身体の使い方とその意味 >	[学生との対話の中で見出す自分の身体の使い方とその意味]
場面 3	軸となる授業者のねがいと実践の中で湧き上がる学生に伝えたい看護技術	< 授業者のねがいに基づき、学生に伝える看護技術 >	[看護師が行う観察と判断の理解]
			[その人を大切に思い関わる姿勢]
			[手技の習得に留まらず患者の生活の流れを整える援助としての体位変換の理解]
		< 授業を実践する中で湧き上がる学生に伝えたい看護技術 >	[すべての援助の基本となるボディメカニクスを繰り返しの練習によって身に付ける]
			[学生の意見によって気付かされたボディメカニクスの活用]
			[患者役割の重要性と患者が感じる感覚を生かした練習]
[できる援助が増えていることを伝えることで高める学習への動機づけ]			

#### 場面 1 授業構想に沿った視点と想定外の学生の疑問から生み出されるまよりの運び

3つのグループ毎に分かれて行った学生デモへのフィードバックとして、教員は、【学生の援助の傾向を捉え、伝えるべき内容を考える】ことに加えて、【学生の意見を聞きつつ、今ここで何を伝えるかを考える】という実践をしていた。これは、< 教員が捉えた学生の傾向と学生の疑問を合わせたまよりの方法性の吟味 > という実践である。そして、【事例の状況に入り込み看護師として援助を行う】【援助の意味やポイントを説明しつつ援助を見せる】というように、学生に説明するだけではなく、患者の状態を気にかけて、< 看護師としての私と教員としての私を行き来しながら見せるデモンストレーション > を行っていた。また、< 想定外の学生の疑問に応えようと思うことで、生み出されるまよりの運び > として、計画していなかった椅子への移乗の援助を見せながら、ADLを段階的にアップすることや看護師の判断を伝えようとしていた。

#### 場面 2 予測を超えた学生の経験から生まれる看護技術の新たな意味づけ

グループ毎のひとりの説明を終え、そのほかのグループが終わるのを待っている間、学生たちは、援助の際の身体の使い方について話していた。学生 A は、教員の援助を見て、患者の身体を掌だけで支えていたと振り返っている。そして、自分だけではなく、みんな患者の背中を掌だけで支えていたと言う。教員は各グループでの演習場面でも、学生デモの場面でも、学生が患者の身体を支える際にそのような身体の使い方をしていないことに気づいておらず、掌だけで支えていたのかと思った。これは【学生の意見から教員の予測を超えた学生の経験を知る】ことができた場面であった。さらに、学生とのこのやり取りの中で、学生同士では、患者役が患者役になりきれず自分で動いてしまうということが確認された。しかし、教員が患者役をすることで、自分で身体を動かしたり、姿勢を保つことが難しいという状況と初めて出会うことになるのだと気づいた。また、腕全体で支えられた方が患者は安心するというように、患者の立場に立って考えることもできていた事も分かった。【学生は患者役になりきることは難しいが、患者の立場に立つことはできる】これらは、< 教員

の予測を超えた学生の経験>であった。加えて、患者の身体を支える際に、看護師の腕全体で支えることと、掌だけで支えることの安定性の違いなど、<学生との対話の中で見出す自分の身体の使い方とその意味>という実践の様相も見られた。

### 場面3 軸となる授業者のねがいと実践の中で湧き上がる学生に伝えたい看護技術

続いて、全体のまとめの場面では、看護師は単に患者さんの身体を起こしたり、身体の向きを変えているのではなく、患者さんの状態を見ながら判断しているのだという【看護師が行う観察と判断の理解】を伝えたいと考えた。また、体位変換の手技を習得するだけでなく、人に関わるということ、説明をする、丁寧に関わるなどその人を大切に思い関わる姿勢を身につけてほしいという【その人を大切に思い関わる姿勢】について、伝えたいと考えた。さらに、【手技の習得に留まらず患者の生活の流れを整える援助としての体位変換の理解】をしてほしいということや【すべての援助の基本となるボディメカニクスを繰り返しの練習によって身に付ける】ということを学生に伝えたいと考えていた。このように<授業者のねがいに基づき、学生に伝える看護技術>という実践が見られた。

さらに、学生は掌だけで患者の身体を支えていたのに対して、教員は腕を使って支えていた。それは看護師と患者の距離が近づくということにつながる。つまり、看護師の支持基底面に患者が近づくことで姿勢が安定する。また、身体全体を使って支えることで、小さな力で患者を支えられるというボディメカニクスの原理そのものであり、【学生の意見によって気付かされたボディメカニクスの活用】について、全体に伝えたいと考えた。また、一方的に援助をして終わりではなく、相手がどう感じたかということや患者役の感覚を生かしながら練習して欲しいという【患者役割の重要性と患者が感じる感覚を生かした練習】や大変間、移乗、移送など【できる援助が増えていることを伝えることで高める学習への動機づけ】ということや大事にしたいと考えた。そして、教員はこのような<授業を実践する中で湧き上がる学生に伝えたい看護技術>をまとめの中で学生に伝えていた。

#### 【考察】

「体位変換」の演習のまとめの場面において教員は、想定外の学生の質問や、予測を超えた学生の経験を捉え、当初の授業の計画を変更しつつ、まとめの運びを生み出すという実践を行っていた。それは、授業における「ねがい」を軸にしつつも、「授業構想と授業実態との相違やズレ、子どもとの相互作用をきっかけにして、判断・意思決定(問題状況への対処)といった即応的な思考を働かせる」(佐々木,2012)という実践であると考えられた。

宮芝ら(2005,2008)は、看護技術の演習において、教員は多様な問題に対応しつつ、作成した授業案の形成的評価を行いながら、教授方法の性質や方針を柔軟に変更していることを明らかにした。本研究においても同様に、予め計画した授業の目的や方法に沿いながら、授業を進めつつも授業構想に沿った視点と想定外の学生の疑問から生み出されるまとめの運びというように、学生の疑問から新たなまとめの運びを生み出したり、予測を超えた学生の経験から生まれる看護技術の新たな意味づけをしつつ、授業を創っていた。そこでは、軸となる授業者のねがいと実践の中で湧き上がる学生に伝えたい看護技術というように、授業デザインにおける授業者の「ねがい」を軸に、学生の状況を捉えつつ授業の運びを創るという教員の実践の様相がみられた。

#### 【引用文献】

- 前川幸子(2017)わざ言語が看護教育にもたらすインパクト,看護教育,58(6),419-427.
- 宮芝智子,舟島なをみ(2008):看護技術演習における学習の最適化に必要な教授活動の解明 - 目標達成場面・未達成場面の学生・教員間相互行為を構成する要素の比較 -,看護教育学研究,17(1),8-21.
- 宮芝智子,舟島なをみ(2005):看護学演習における教授活動の解明 援助技術の習得を目標とした演習に焦点を当てて,看護教育学研究,14(1),9-22.
- 文部科学省(2004)看護学教育の在り方に関する検討会報告「看護実践能力育成の充実に向けた大学卒業時の到達目標」
- 文部科学省(2011)大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会「大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会最終報告」
- 佐伯胖,前川幸子(2008):インタビュー 看護教育への警鐘 いまこそ行動主義的な教育体制からの脱皮を,看護教育 49(5),388-394

佐々木佳子(2012):教育実践における教師の思考に関する研究の展望;教師の気づき(アウェアネス)に焦点をあてて,北海道大学大学院教育学研究院紀要,117,131-145 他

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 脇坂豊美
2. 発表標題 「体位変換」の演習のまとめの場面における看護教員の教育実践の様相
3. 学会等名 日本教師学学会 第20回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 脇坂豊美
2. 発表標題 看護教員が捉えた看護学生の「体位変換」の援助の特徴
3. 学会等名 日本教師学学会 第19回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 脇坂豊美
2. 発表標題 「シーツ交換」の看護技術の演習において教員が学生の課題を発見し、判断し、行為化する過程
3. 学会等名 日本教師学学会 第18回大会
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	本田 由美  (Honda Yumi)  (10446122)	甲南女子大学・看護リハビリテーション学部・講師    (34507)	

## 6. 研究組織（つづき）

	氏名 (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分担者	前川 幸子  (Maekawa Yukiko)  (30325724)	甲南女子大学・看護リハビリテーション学部・教授    (34507)	
研究 分担者	岡本 朋子  (Okamoto Tomoko)  (60512340)	甲南女子大学・看護リハビリテーション学部・講師    (34507)	